

# 年代間における集団間バイアス ——外集団同質性効果と内集団ひいき——<sup>1)2)</sup>

佐 久 間 勳

## 問 題

### 特定の年代の人々に対するイメージ

ある特定の年代の人々に対するイメージについての記述や発言を、テレビ、新聞、雑誌などのマスメディアや、日常生活の中の会話を通して知ることがある。例えば、「最近の若者は礼儀知らずだ」「高齢者の考え方は古い」などということである。こうしたイメージにはいくつかの特徴がある。第一に、これらのイメージは非常に均質的なものである。すなわち、ある年代の人々の多様性・個人差を無視したものである。第二に、これらのイメージの内容は肯定的ではなく、むしろ否定的なことが多い。第三に、これらのイメージは自分の年代の人々に対してではなく、自分が含まれない年代の人々に対して持つことが多い。すなわち、内集団に対するイメージではなく、外集団に対するイメージが均質的で、否定的なものになりがちである。なぜわれわれは、自分が含まれない年代の人々に対してこのようなイメージを持つのでしょうか。本研究は、人々を内集団と外集団に分類する社会的カテゴリー化によって生起する2つの集団間バイアスが、その原因となっている可能性を考えた。それは、外集団同質性効果(out-group homogeneity effect)と内集団ひいき(in-group favoritism)である。

### 外集団同質性効果とは？

外集団同質性効果とは、内集団の成員同士と比較して外集団の成員同士の性格特性、態度、行動が類似していると知覚する現象である(Park & Rothbart, 1982)。これまでに外集団同質性効果の生起に関して、いくつかの原因が指摘されている。

例えば、内-外集団成員に対する熟知性の違い(Linville, Fisher, & Salovey, 1989)、内-外集団の認知表象の違い(Park & Rothbart, 1982)、内-外集団の判断に用いる情報の違い(Park & Judd, 1990)などである(詳しくはPark, Judd, & Ryan (1991), Devos, Comby, & Deschamps (1996)を参照)。

これまでに多くの研究が外集団同質性効果を見出している。特に、実験的に作られた内-外集団を扱った研究よりも、現実の社会的カテゴリーを扱った研究において外集団同質性効果が強く見出されている(Ostrom & Sedikides, 1992)。例えば、性別カテゴリー(Park & Rothbart, 1982: Experiment 1)、名古屋人と大阪人という地域カテゴリー(唐沢, 1996)を扱った研究において外集団同質性効果が見られている。さらに若者と高齢者という年代カテゴリーを扱った研究においても外集団同質性効果は見られている(Linville et al., 1989, Experiment 1)。本研究もこれらの先行研究と同様に、若者と高齢者という2つの社会的カテゴリー間に外集団同質性効果が見られると予測する。

### 内集団ひいきとは？

もう一つの集団間バイアスである内集団ひいきとは、外集団成員と比較して内集団成員を好意的に評価したり、分配を多くしたりする現象である。社会的アイデンティティ理論は、この現象を説明する上で重要なものである(Hogg & Abrams, 1988)。社会的アイデンティティ理論によれば、われわれは、外集団よりも内集団を好意的に評価したり、扱ったりすることを通して、肯定的な自己評価を獲得しようとすると考えられる。すなわち、肯定的な自己評価への欲求が内集団ひいきの原因であると考えている。

## 方 法

実際に多くの研究が内集団ひいきを見出している。例えば、村田（1993）は大学の専攻を使った研究を実施し、学生が自分の所属しない専攻の人々よりも、自分の所属する専攻の人々を好意的に評価することを見出している。また Linville et al. (1989, Experiment 1) は、若者と高齢者において、互いが自分の年代の人々を好意的に評価することを見出している。本研究も、社会的アイデンティティ理論の予測と同様に、若者と高齢者という2つの社会的カテゴリーの間で内集団ひいきが見られると予測する。

### 接触と集団間バイアス

外集団同質性効果、および内集団ひいきという現象を見出す研究がある一方で、こうした集団間バイアスを除去する手段を見出そうとする研究もある。そうした研究の代表的なものとして接触仮説 (contact hypothesis) がある。接触仮説とは、偏見やステレオタイプの対象となる外集団成員と接触することが、彼らに対する偏見やステレオタイプの低減につながるというものである (Allport, 1954)。本研究は、接触仮説に基づき、互いの集団成員との接触の程度が多くなるほど、外集団同質性効果および内集団ひいきという集団間バイアスが低減すると予測する。

ただし接触仮説が成功するためにはいくつかの条件が必要であることも指摘されている (Cook, 1985)。本研究では、接触状況に関する質問項目も用意し、それらと集団間バイアスの関連も検討する。

### 本研究の仮説

本研究の仮説をまとめると以下のようになる。

仮説1：自分の年代の人々と比較して、他の年代の人々に対して同質的に知覚するであろう (外集団同質性効果)。

仮説2：他の年代の人々と比較して、自分の年代の人々に対して好意的な印象を持つだろう (内集団ひいき)。

仮説3：仮説1、仮説2の傾向は、他の年代との接触が多くなるほど小さくなるだろう (接触仮説)。

### 実験参加者

東京都内の国立4年制大学の学生および私立女子短期大学の学生64名 (男性14名、女性50名、年齢の平均=19.47歳、範囲=18~23)、東京都内の福祉施設で趣味のサークルに参加している46名 (男性18名、女性28名、年齢の平均=72.78歳、範囲=60~87歳) が実験に参加した。

### 実験計画

知覚者 (若者/高齢者) × ターゲット (若者/高齢者) の2要因被験者間要因であった。知覚者の要因は実験参加者の年齢に応じて若者または高齢者の条件に配置した。ターゲットの要因はランダムに配置した。

### 手続き

2000年の11月から12月に実験を実施した。若者の実験参加者には、授業時間および部活動の時間に集団で一斉に質問紙への回答を求めた。高齢者の実験参加者には、サークルの活動時間に集団で一斉に質問紙への回答を求めた。質問紙には、ターゲットが若者 (10代、20代の人) または高齢者 (65歳以上の人) の2種類があった。質問紙への回答時間は、若者はおよそ15分から20分、高齢者はおよそ60分であった。

### 質問紙の内容

質問紙は以下の内容を含んでいた。

**ターゲットに対する同質性知覚** 唐沢 (1996)、Park & Rothbart (1982) を参考に同質性知覚に関する質問項目を作成した。本調査とは異なるサンプル (10代~70代の男女計29名) に対する事前調査により、若者に典型的で肯定的な項目、若者に典型的で否定的な項目、高齢者に典型的で肯定的な項目、高齢者に典型的で否定的な項目をそれぞれ3項目ずつ、合計12項目用意した (項目の内容については付表1を参照)。このときに、一方の年代にとって典型的な項目が、他方の年代にとっても典型的なものにならないように配慮した。それぞれの項目について、ターゲットにどのくらい当てはまるかを7件法で尋ねた。

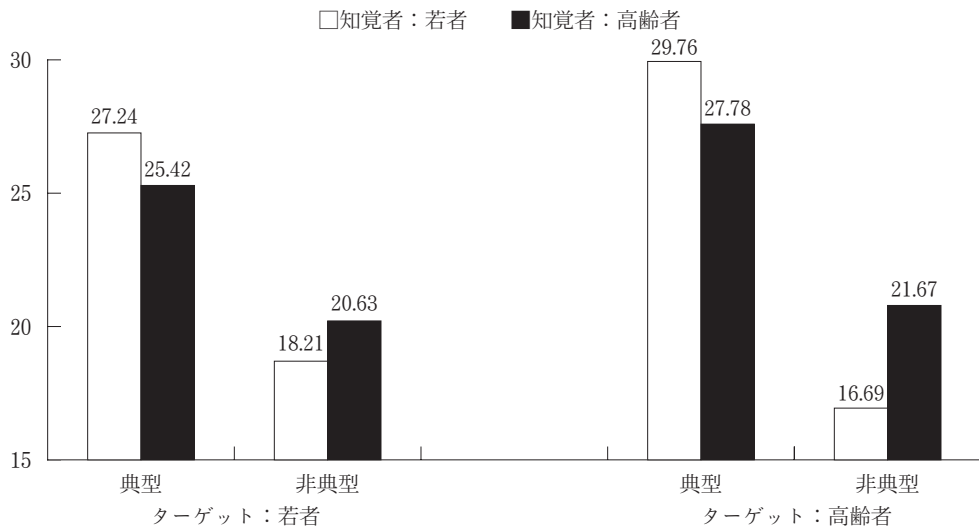


Figure 1 条件ごとの典型得点・非典型得点の平均値

注) 得点の範囲は6～42。得点が高いほど、ターゲットが典型的または非典型的項目に当てはまっていることを意味する。

**ターゲットに対する印象** 山内（1996）を参考に、肯定的形容詞6個（強い、頼りになる、外向的だ、魅力的だ、好きだ、親切だ）、否定的形容詞6個（魅力がない、頼りにならない、嫌いだ、不親切だ、内向的だ、弱い）の計12個を用意した。それぞれの形容詞について、ターゲットにどのくらい当てはまるかを5件法で尋ねた。

**他年代の人々との接触の程度** 家族・親類内、近隣住民のそれぞれについて、他年代の人々がいるかを2件法（いる／いない）で尋ねた。「いる」と回答した場合は、さらに、その人数と、接触の程度を尋ねた（接触の程度は5件法）。加えて、今年に入ってから、他年代の人々と話をしたかを2件法（した／しない）で尋ねた。話をしている場合、それがどの程度であったかを5件法で尋ねた。

**他年代の人々との接触状況** Islam & Hewstone（1993）を参考に質問項目を作成した。具体的には、「他年代の人と自主的に接触をしたか」、「接触により相手と親密になれたか」などの5項目について5件法で尋ねた。

**集団同一視** 唐沢（1996）を参考に質問項目を作成した。具体的には、「自分と同じ年代の人たちと一体感を持っているか」「自分と同じ年代の人に対して愛着を持っているか」などの7項目について5件法で尋ねた。

## 結果

### 結果の整理

本研究で使用した質問紙のなかでは、若者を「10代、20代の人」、高齢者は「65歳以上の人」としていた。そこで高齢者のうち65歳未満の6名を分析から除外した。最終的な分析対象となったのは、知覚者が若者でターゲットが若者の条件34名、知覚者が若者でターゲットが高齢者の条件30名、知覚者が高齢者でターゲットが若者の条件21名、知覚者が高齢者でターゲットが高齢者の条件19名の計104名であった。

### 年代間の同質性知覚

本研究では、ターゲットが外集団の場合、典型的な行動に当てはまる程度と非典型的な行動に当てはまる程度の差異が大きく、ターゲットが内集団の場合、典型的な行動に当てはまる程度と非典型的な行動に当てはまる程度の差異が小さいということが外集団同質性効果であると考えた（唐沢、1996; Park & Rothbart, 1982）。この考え方に基づき、同質性知覚の評定に使用した12項目をもとに以下の得点を算出した。まず若者に典型的な行動である6項目、高齢者に典型的な行動である6項目をそれぞれ単純加算して2つの得点を算出した（前者の得点の $\alpha$ 係

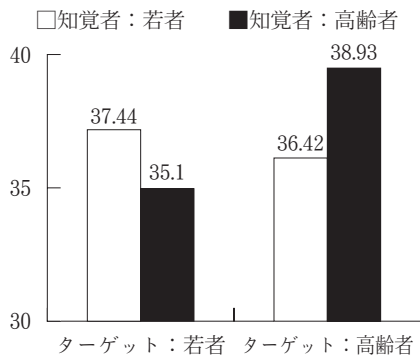


Figure 2 条件ごとの印象得点の平均値

注) 得点の範囲は12~60。得点が高いほどターゲット集団に対して望ましい印象を持っていることを意味する。

数は0.73, 後者の得点の $\alpha$ 係数は0.75)。続いて、ターゲットが若者条件である場合、若者に典型的な行動である6項目を単純加算した得点を典型得点、高齢者に典型的な行動である6項目を単純加算した得点を非典型得点とした。一方、ターゲットが高齢者条件である場合、高齢者に典型的な行動である6項目を単純加算した得点を典型得点、若者に典型的な行動である6項目を単純加算した得点を非典型得点とした。

条件ごとの典型得点と非典型得点の平均値はFigure 1の通りだった。条件間に差があるかどうかを検討するために、知覚者×ターゲット×得点の種類3要因の分散分析を実施した(最後の要因は被験者内要因)。もし外集団同質性効果が見られるのであれば、知覚者×ターゲット×得点の種類の交互作用が有意になるはずである。分散分析の結果、得点の種類の主効果( $F(1,96)=166.08, p<.001$ )、ターゲットの主効果( $F(1,96)=2.94, p<.10$ )、知覚者×得点の種類交互作用( $F(1,96)=19.12, p<.001$ )、ターゲット×得点の種類交互作用( $F(1,96)=4.38, p<.05$ )が有意または有意傾向であった。知覚者×ターゲット×得点の種類交互作用は有意ではなかった( $F(1,96)=1.13, n.s.$ )。

知覚者×得点の種類の交互作用を詳細に検討するために、知覚者ごとに得点の種類を要因とした分散分析を行った。その結果、知覚者がいずれの条件であっても得点の種類的主効果が有意であった( $Fs(1,96) > 14.28, ps < .001$ )。この交互作用は、知覚

者が若者の場合の典型得点( $M=28.49$ )と非典型得点( $M=17.45$ )の差異が、高齢者の典型得点( $M=26.60$ )と非典型得点( $M=21.15$ )の差異よりも大きいことによるものであった。すなわち、若者は高齢者と比較して、いずれのターゲットに対しても同質的に知覚していた。

ターゲット×得点の種類の交互作用を詳細に検討するために、ターゲットごとに得点の種類を要因とした分散分析を行った。その結果、ターゲットがいずれの条件であっても得点の種類的主効果が有意であった( $Fs(1,96) > 78.46, ps < .001$ )。この交互作用は、ターゲットが高齢者の場合の典型得点( $M=28.77$ )と非典型得点( $M=19.18$ )の差異が、若者の場合の典型得点( $M=26.33$ )と非典型得点( $M=19.42$ )の差異よりも大きいことによるものであった。すなわち、高齢者は、いずれの知覚者からも同質的に知覚されていた。

#### 年代間の印象

年代間の印象について検討するために、印象評定に使用した12項目を単純加算して印象得点を算出した。このときに得点が高くなるほど印象が望ましくなるようにした。この印象得点の $\alpha$ 係数は0.81であった。

条件ごとの平均値はFigure 2の通りだった。条件間に差があるかどうかを検討するために、知覚者×ターゲットの2要因の分散分析を実施した。その結果、知覚者×ターゲットの交互作用が有意傾向であった( $F(1,95)=3.80, p<.06$ )。知覚者×ターゲットの交互作用を詳細に検討するために、知覚者ごとに、ターゲットを要因とした分散分析を実施した。知覚者が若者条件の場合、ターゲットの主効果は有意でなかった( $F < 1$ )。一方、知覚者が高齢者条件の場合、ターゲットの主効果が有意であった( $F(1,95)=3.96, p<.05$ )。高齢者は、若者( $M=35.10$ )よりも高齢者( $M=39.80$ )に対して望ましい印象を持っていた。すなわち、高齢者だけが内集団ひいきを示していた。これは仮説2を部分的に支持する結果であった。

#### 他年代の人々との接触と集団間バイアス

他年代の人々との接触については、接触の程度と接触の状況の2つに分けて検討した。

Table 1 接触得点, 接触状況, 典型得点, 非典型得点, 印象得点の相関

	若者→高齢者 (n=30)			高齢者→若者 (n=20)		
	典型得点	非典型得点	印象得点	典型得点	非典型得点	印象得点
接触得点	.12	.08	.004	-.48*	.16	.35
自ら接触した	-.05	.06	.49**	-.12	.51*	.47+
親密な関係になった	-.17	-.008	.37*	-.02	.42	.56*
相手から何かを得た	-.04	-.06	.37*	.25	-.05	.01
相手に役立った	.13	.06	.28	-.08	.37	.37
相手は典型的な人物であった	.26	-.04	.07	.17	-.07	.27

注) \*\*p<.01, \*p<.05, +p<.10

**接触の程度** 他年代の人々との接触の効果について検討するために、「家族・親類内の他年代の人々との程度接触があるか」「近隣の他年代の人々との程度接触があるか」「今年に入って他年代の人々との程度話をしたか」の3項目の回答を単純加算して接触得点を算出した。このときに「他年代の人々が家族・親類内いない」「他年代の人々が近隣にいない」「今年に入って他年代の人々と話をしていない」と回答した場合は0点として加算した。この接触得点の範囲は0から15になる。続いて、若者が高齢者を判断する条件（以下、若者→高齢者条件）、および高齢者が若者を判断する条件（高齢者→若者条件）の実験参加者を対象に、それぞれの条件ごとに、接触得点と典型得点, 非典型得点, 印象得点との相関を算出した (Table 1)。若者→高齢者条件では接触得点と典型得点, 非典型得点, 印象得点の間に有意な相関は見られなかった。高齢者→若者条件では接触得点と典型得点の間に有意な相関が見られた。高齢者は、若者との接触の程度が多いほど、若者が典型的な行動に当てはまらないと判断していた。高齢者→若者条件の結果は仮説3を支持するものであった。

**接触の状況** 接触の状況に関する5つの質問項目と、典型得点, 非典型得点, 印象得点の相関を算出した (Table 1)。若者→高齢者条件では3つの質問項目と印象得点の間に有意な相関が見られた。若者は、自ら進んで高齢者と接触した、接触により高齢者と親密な関係になった、接触により高齢者から何かを得たほど、高齢者に対する印象が望ましくなった。高齢者→若者条件では、接触状況に関する1つの質問項目と非典型得点の相関、接触状況に関する

2つの質問項目と印象得点の相関が有意または有意傾向であった。高齢者は、自ら進んで接触したほど、若者が非典型的な行動に当てはまると判断していた。また高齢者は自ら進んで接触した、接触により若者と親密な関係になったほど、若者に対する印象が望ましくなっていた。

## 考 察

### 外集団同質性効果について

本研究は、外集団同質性効果を見出せなかった。その一方で予測しなかったいくつかの効果が見られた。一つは、若者は高齢者と比較して、いずれのターゲットに対しても同質的に知覚していたという結果である。この結果については、本研究の実験参加者となった若者と高齢者の間の差異(例えば性格特性や回答状況)がもたらしたと推測できる。もう一つは、高齢者はいずれの年代からも同質的であると知覚されている結果である。これは高齢者ステレオタイプが年代を問わず多くの人々に共有されている可能性を示唆するものだと考えられる。

### 内集団ひいきについて

本研究では、高齢者だけが内集団ひいきを示すという結果が得られた。これについては次のような解釈が可能である。

第一に、若者と高齢者の間で、自分の年代に対する集団同一視の強さが異なるという可能性である。つまり、高齢者は若者と比較して、集団同一視が強いために内集団ひいきを示したという可能性である。このことを確認するために、集団同一視を測定する質問項目に対して因子分析を施し、第一因子に負荷

の高い4項目を単純加算したものを集団同一視得点として、若者と高齢者の得点の平均値を比較した(得点の範囲は4~20。得点が高いほど集団同一視が強いことを意味する。)。その結果、高齢者( $M=13.38$ )は若者( $M=10.70$ )と比較して集団同一視得点が高かった( $t(95)=3.66, p<.001$ )。したがって高齢者だけが内集団ひいきを示したという結果は、集団同一視の強さが異なっていることによると解釈できる。

第二に、集団の地位の問題である。先行研究では、集団の地位の高さが集団間バイアスに影響すること、特に集団の地位が低い場合、内集団ひいきを示しやすいことを指摘している(例えば、Brauer, 2001)。本研究も、若者と高齢者を比較した場合、高齢者の地位が低いために、高齢者だけが内集団ひいきを示した可能性が考えられる。ただし若者よりも高齢者の地位が低いことを示唆するデータは、本研究からは得られていない。

### 接触と集団間バイアスの関連

高齢者→若者条件において、接触の程度と典型得点との間に有意な相関が見られたことは、接触により集団間バイアスが低減することを示唆するものであった。つまり、接触仮説の妥当性を示唆するものであった。一方で、若者→高齢者条件においては、接触の程度と3つの得点との間に有意な相関が見られなかった。

ただし接触状況に関する質問項目のいくつかは、どちらの条件でも、3つの得点のいずれかと有意な相関が見られた。この結果は単に接触するだけでなく、その接触状況が集団間バイアスの低減に重要であることを示唆するものであり、Cook(1985)の議論に符合するものである。

### 本研究の問題点

最後に本研究に残された3つの問題点を挙げる。

第一に同質性知覚の測定に関する問題である。本研究では、ターゲットに典型的、非典型的な項目を用意して、それらの項目に「ターゲットがどのくらい当てはまるか」ということを尋ねた。それに対して先行研究では、ターゲットに典型的、非典型的な項目を用意して、「ターゲットのうちの何%がそれらの項目に当てはまるか」ということを尋ねている

(例えば、唐沢, 1996)。このような違いがあったために、本研究では同質性知覚を正確に測定できなかった可能性がある。今後は、先行研究と同じ方法を使用した上で、再度、若者と高齢者の間で外集団同質性効果が見られるかどうかを検討する必要がある。

第二に、集団間関係に関する問題である。内集団ひいきに関する考察でも述べたが、若者と高齢者の関係は対称的であるというよりも、むしろ非対称的(地位、勢力、集団サイズ)であると考えられる。そのために互いの集団が等しく集団間バイアスを示さなかったと考えられる。今後の研究は、集団間関係を考慮に入れて仮説を立てる必要がある。

第三に接触の効果の解釈に関する問題である。本研究は接触の程度、および接触状況の質問と、集団間バイアスに有意な相関が見られた。しかしこの結果はあくまで相関関係を示しただけであり、因果関係については推測にしかすぎない。今後の研究では、山内(1996)のような実験的手法を取り入れること、またはStangor, Jonas, & Hewstone(1996)のように継続的なデータ収集を行うことにより、接触が集団間バイアスの低減にどのような効果を持つかについての検討をする必要がある。

### 引用文献

- Allport, G. W. 1954 *The nature of prejudice*. Massachusetts: Presus Books
- Brauer, M. 2001 Intergroup perception in the social context: The effects of social status and group membership on perceived out-group homogeneity and ethnocentrism. *Journal of Experimental Social Psychology*, **37**, 15-31.
- Cook, S. W. 1985 Experimenting on social issues: The case of school desegregation. *American Psychologist*, **40**, 452-460.
- Devos, T., Comby, L., & Deschamps, J.C. 1996 Asymmetries in judgments of ingroup and outgroup variability. In W. Stroebe & M. Hewstone (Eds.), *European review of social psychology*. Vol.7. Chichester, UK: Wiley. pp.95-144.
- ホッグ M.A.・アブラムズ D. 吉森護・野村泰代(訳)  
1995 社会的アイデンティティ理論 新しい社会心理学体系のための一般理論 北大路書房 (Hogg, M. A. & Abrams, D. 1988 *Social identification: A social psychology of intergroup relations and group process*. London and New York: Routledge)

- Islam, M. R. & Hewstone, M. 1993 Dimensions of contact as predictors of intergroup anxiety, perceived outgroup variability and outgroup attitude: An integrative model. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **19**, 700-710.
- 唐沢穰 1996 地域間ステレオタイプと集団間認知—名古屋人・大阪人ステレオタイプと外集団均質化効果—日本グループ・ダイナミクス学会第44回大会発表論文集, 100-101.
- Linville, P. W., Fisher, G. W. & Salovey, P., 1989 Perceived distributions of the characteristics of in-group and out-group members: Empirical evidence and a computer simulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 165-188.
- 村田光二 1993 内集団—外集団認知の差異について—大学生のクラスの場合— 日本グループ・ダイナミクス学会第41回大会発表論文集, 144-145.
- Ostrom, T. M. & Sedikides, C. 1992 Out-group homogeneity effects in natural and minimal groups. *Psychological Bulletin*, **112**, 536-552.
- Park, B., Judd, C. M., & Ryan, C. S. 1991 Social categorization and the representation of variability information. In W. Stroebe & M. Hewstone (Eds.), *European review of social psychology*. Vol.2. Chichester, UK: Wiley. pp.211-245.
- Park, B. & Judd, C. M. 1990 Measures and models of perceived group variability. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 173-191.
- Park, B. & Rothbart, M. 1982 Perception of out-group homogeneity and levels of social categorization: Memory for the subordinate attributes of in-group and out-group members. *Journal of Personality and Social Psychology*, **42**, 1051-1068.
- Stangor, C., Jonas, K., & Hewstone, M. 1996 Influence of student exchange on national stereotypes, attitudes and perceived group variability. *European Journal of Social Psychology*, **26**, 663-675.
- 山内隆久 1996 偏見解消の心理—対人接触による障害者の理解— ナカニシヤ出版

## 註

- 1) 本研究は徳永圭一氏が平成12年度一橋大学社会学部に提出した卒業論文のデータを再分析したものである。データ利用にあたり、徳永圭一氏、一橋大学の村田光二先生に許可をいただいた。記して感謝する。
- 2) 本研究の一部は日本社会心理学会第42回大会(愛知学院大学)にて発表された。

## 附表 1

- 若者・典型・肯定的  
今、恋をしている  
病院には滅多に行かない  
記憶力がよい
- 若者・典型・否定的  
目上の人に平気で失礼なことを言う  
敬語が使えない  
常識的なことを知らない
- 高齢者・典型・肯定的  
選挙には必ずいく  
支持している政党がある  
昔話をよく知っている
- 高齢者・典型・否定的  
家では横になっていることが多い  
病気にかかりがちである  
通院することが多い